

ルパン三世 短編小説 第2話



© モンキー・パンチ / TMS・NTV

女神は誰に微笑むのか。

第一章

この街は、どうかしている。

偽物の「微笑みの女神」を捕ませられた翌朝、マルシェがオープンする朝6時を前にラビリントの街のど真ん中にある広場にアマタバが仁王立ちしていた。

早朝にもかかわらず、ほぼすべての街人が集まる輪の中心で、烏肌が立つほどの笑顔が演説をはじめた。

「予告までしていたルパン三世は、私たちの大切な宝石を、盗み出すことができませんでした。

これでも、彼は世界の大泥棒なのではないでしょうか。いや、彼はただのコソ泥です。

そして、今回の結果は、彼以上にこの街の民が優れている証といえるでしょう」

そんなアマタバの戯言が終わるタイミングで、けたたましいサイレンの音と聞き慣れた濁声が近づいてきた。

「あなたが、アマタバさんですか？」

「はい、あなたは？」怪訝な表情で聞き返す。

「私は、インターポールの銭形です」

季節外れの蒸し暑さを感じるトリノに、トレンチコート姿の愛しくも暑苦しい中年がやってきた。

「ルパンからの予告状があったと、本局から聞いたのですが。それであれば、事前に私たちにお伝えいただきたかったですな」とつつあんのこういう物言いは悪くない。

「何か、問題でも？」自らを否定されたと感じたアマタバは、冷めた表情で銭形に噛みついた。

「ルパンが世界中で指名手配されている大泥棒ということは、ご存知だと思います。

なので、予告状を受け取ったのであれば、すぐに私たちに連絡していただかないと」

そんな、銭形の言葉に心を逆撫するような高笑いをしながらアマタバはこう放った。

「いままでもそうだったように、どうせあなたたちはルパンを逮捕できないのでしょうか？

そんな無能な人たちがいても無駄なだけ。一刻も早くこの場を立ち去っていただきたい。

私たちは、私たちのやり方で、ルパンを退治しますから。ほほほ……」

その薄気味悪い下品な笑い方に、さすがの銭形のつつあんも、船酔いに似た気持ち悪さを感じたようだ。

「でもですよ、ルパンは警察が確保すべき人物です。あなたは、警察ではないということを、

改めて認識していただきたい！」いつになく厳しい口調で一括する銭形の言葉に、

アマタバのいやらしい笑みは一気にくすみを見せた。

第二章

俺は、もう一度ラビリントを散策することにした。

それは、改めてお宝を GET するための下見はもちろん、

以前から感じているこの街の違和感の答えを見つけ出すためだった。

それにしても、黄色い相棒のパーツの手配と、次のプランの用意に思いの外時間がかかってしまった。しかし、そのおかげでおもしろい話が聞けたのは、思いがけない収穫だった。

次元たちとの待ち合わせ場所に着いたのは、予定時間を 1 時間ほど過ぎた頃だった。

約束のバーで馴染みのバーボンを味わう次元と、飲み慣れない白ワインのせいで頬を赤らめている五ェ門が、いつもより穏やかな表情で俺を見つめる。

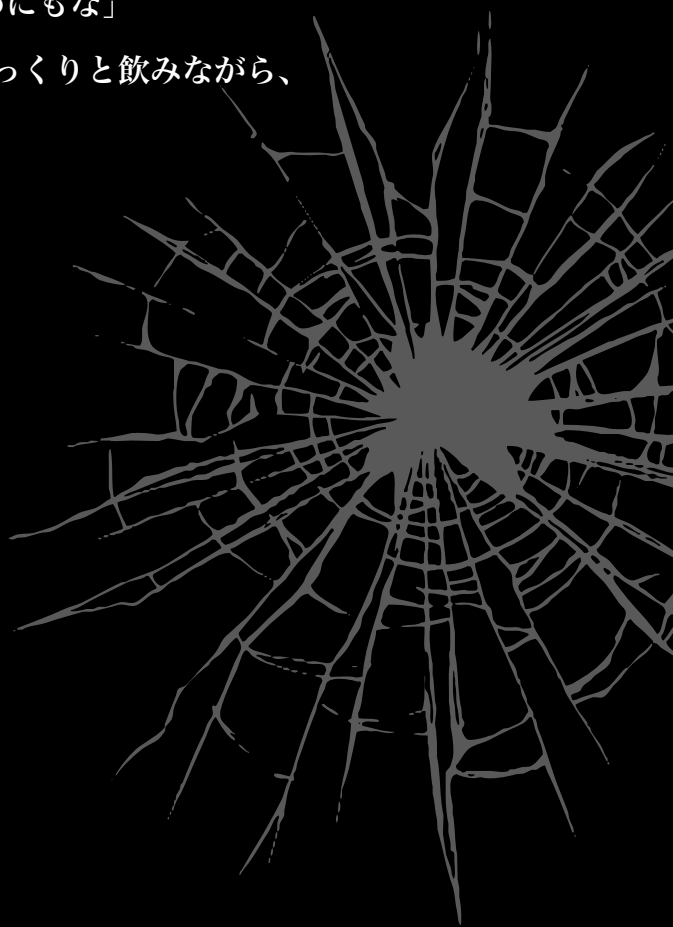
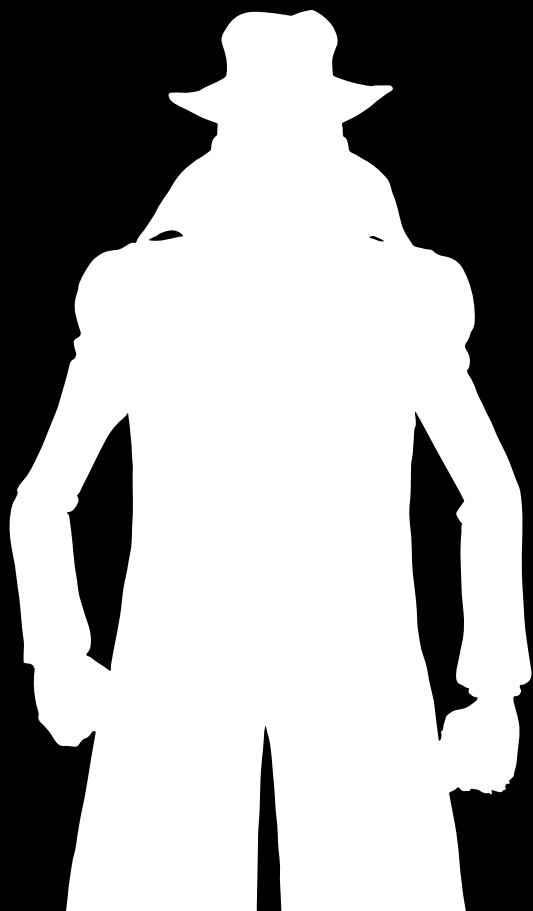
「遅かったじゃねえか、ルパン」

右手の親指と人差し指にナッツを摘みながら次元が微笑みかけてくる。

「わりー、わりー。なあ、次元、五ェ門。いろいろあったおかげで、謎が解けたかもしれないぜ」
この街を改めて調べる中で、うっかり見逃してきたことに気づいたのだ。

「今日は、ゆっくり飲もうぜ。トリックを確認するためにもな」

次元のボトルからグラスに並々注がれたバーボンをゆっくりと飲みながら、
日付が変わるまで街の様子に酔いしれた。



第三章

だいぶ長い付き合いになるが、不二子は相変わらず掴みどころがない。

常にアマタバに寄り添うその距離感是不愉快極まりないが、

きっと不二子なりの企みがあるのだろう。

地元で流行のファッションに身を包んだ姿で、

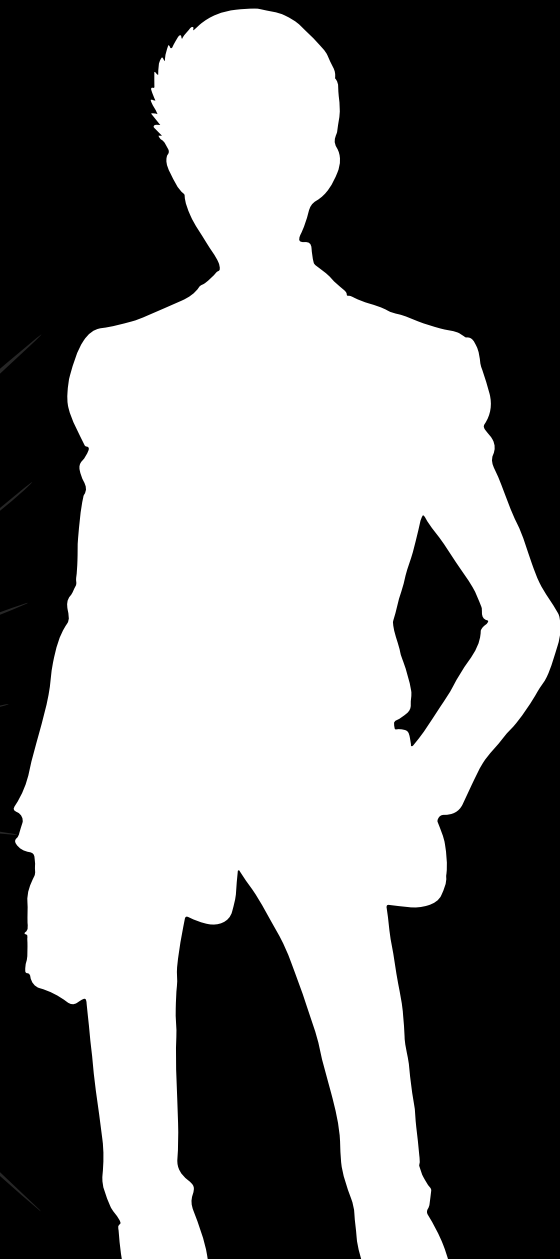
再びマニフィコ美術館に忍び込んだ俺は、本物の「微笑みの女神」と再会を果たした。

この輝きと奥深い色合いは、本物に間違いない。

前回舐められたツケは、返さないと都合がつかない。

しかし、あの目盗みに入ったにも関わらず警備が手厚くなっていないのは、例のことがあるからだろう。ただ、前回の失敗も含め、少しの油断もできないのは変わらない。

同じ轍は踏むわけにはいかないのだ。



第四章

銭形は、すっかりこの街がお気に入りのようだ。

変装をしているとはいえ、1日に何度もラビリントをうろつく俺にまったく気づくことがない。

通りかかるトラットリアで、度々銭形の姿を見かけているのに。

職務中ということもあってか、名物のワインは口にしていないようだが、

いつもパスタやピッツァを頬張っている。俺の統計によると、銭形はミートボールが入ったトマトスパゲッティが好みらしい。

唇の両端をソースまみれにしている中年警部の姿は、いつ見ても愛らしい。

そういえば、この間街で出会った幼い少女と、バールの前で再会した。

変装している俺に気づかず、彼女はまた話しかけてきた。

「おじちゃん、どこから来たの？」

と。そこで、鎌をかけてみた。

「ルパンっていう泥棒を捕まえるために、警察のおじさんたちとやってきたんだよ」と。

その言葉を聞いた少女は、表情を一変させた。

「余計なことしなくていいの！泥棒とか、悪い人は、みんなで捕まえて痛い目に合わせるんだから！おじさんは知らない人だから、余計なことしちゃダメなんだから！」と大きな声で捲し立てるように叫んできた。

「悪かった。ゴメンね。おじさんは、もうルパンを捕まえたりしないよ。約束だ。ちなみに、お父様とは、いつもどうやってお話しするの？」

すると少女は「えっとねえ・・・」

なるほど、そういうことか。

この街は、いい意味でも、悪い意味でも、村意識が強すぎる。

こういう街や村は、時代に関わらず、あるところにはある。

ただ、ラビリントのそれは、街人の意識に強く深く侵食し過ぎていた。

第五章

マニフィコ美術館を捜索して10回目。

不二子は、まだ俺に気づいていない。

アマタバと不二子の会話や街の噂、そして側近との会話から不二子の狙いはわかってきた。

前回「微笑みの女神」の奪取に失敗した時、不二子は俺たちがお宝 GET する前にアマタバの金庫に本物を移動させて、そこから盗もうと企てていたようだ。

しかし、異常なほどに神経質なアマタバは、本来隠す予定だった金庫ではなく、別の場所に彼女を潜めたいらしい。

でも、なんだか不二子らしくない。いつもの不二子はもっと慎重なはずだ。

「アマタバ様、微笑みの女神が盗まれなくてよかったですね」

「不二子、微笑みの女神が盗まれるなんて、決してあり得ませんよ。相手がルパンであろうと、誰であろうと。そうそう、不二子であろうとね。ほほほ……」

「あら、ヤダ。私は盗んだりしませんよ。でも、アマタバさん。世界の大泥棒ルパン三世ならば、何度でも同じお宝に挑戦してくると思いますよ」

「何度来ても無駄ですよ。いままでの泥棒たちといっしょ。私のコレクションを盗もうとした泥棒は、結局ラビリントからは出られず、悲惨な最後を迎えるのですから」。

そんな会話を、俺は無線越しに聞いていた。

それにしても、アマタバと不二子の距離の近さが、なんだかモヤモヤする。

第六章

アジトに戻った俺たちは「微笑みの女神」奪取について、念入りに話をした。

もちろん、これまでに解いてきた謎や知り得た話、そしてこれまでの見立ても含めて。

「微笑みの女神」を手に入れるプランは、基本的に前回と変わりはない。

大きく違うのは、相棒がフィアット『500e』というEV車に変わったことくらいだ。

今回のヤマは、コイツじゃないと乗り越えられない。それは、全員一致の見解だ。

「なあ、ルパン。街の仕掛けはともかく、また偽物を掴まされるってことはないのか？」

いつになく、次元がナーバスになっている。前回の失敗を相当気にしているのだろう。

「ああ、今回は大丈夫だと思うぜ。不二子が心変わりしなければな」

「また、不二子かよ」呆れ顔で次元がつぶやく。

それを、目を閉じたまま、不快な表情で五ェ門は聞いていた。

「さあ、準備は整った。お宝GETと汚名返上のため、もう一度あの館へ行くとしようぜ」。

次元が大切にしている年代物のボトルから、3つのグラスにバーボンを注ぎ、前祝いの乾杯を交わした。



第七章

リベンジの 때가 やってきた。

俺たちは予定通り、新たな相棒『500e』でマニフィコ美術館へ向かった。

いつもの黄色いアイツとも、前回修羅場を切り抜けた『500』とも違う最新の相棒とのドライブに、初めて嗜むスパークリングワインのような爽やかさと洗練さを感じた。

走ること数十分、26:30に復讐の館に到着。

前回よりも遅い時間のせいか、街は完全なる静寂に包まれていた。

しかし、29時になれば、1時間後にオープンするマルシェへの搬入で数多くのトラックや自動車がやってくる。その後、無数のテントが軒を連ね、朝日に叩き起こされた街に活気がやってくる。

今回のミッションは、それまでに完結させる必要がある。

到着すると同時に、首尾よく今回のプロジェクトに着手した。

難なくマニフィコ美術館に潜入した俺は、監視カメラの制御や赤外線センサーやバックアップシステムの解除などを予定通り成功させた。

前回同様、今回も美術館の畏はありきたりなものばかりだ。

次元は『500e』で、五ェ門は美術館の入り口で、万一に備えて身を潜める。

そして、俺は何の問題もなく念願の「微笑みの女神」へたどり着いた。

この輝き、この色彩、そして吸い込まれるようなこの神秘さは、愛しの宝石に間違いない。

いつもの7つ道具を駆使し、お宝をGETした。

この手薄な警備にも、今回は驚かない。これこそが、この街の性格なのだから。

「微笑みの女神」をいつものように小さなバッグ型のケースに丁寧に収めた後、美術館の外に出た俺は『500e』で次元、そして五ェ門と合流した。

「おい、ルパン。予定よりちょっと早いけど、この場をオサラバするとしようぜ」

「いや、あと3分待機だ」

「どうしてだ？少しでも早く、立ち去った方が・・・」

そう言いかけた次元の目の前を、1台の馬車が通り過ぎていった。

「なあ。オサラバするのは、この街にエンジンの音が響きはじめてからだ」

第八章

いつもより朝日が眩しく感じる。

早朝5時を迎えたラビリントには、肉や魚介類、野菜や花、そして日用品まで、多彩な商品を載せた車両が、迷路のような道を目まぐるしく行き来しはじめた。

さあ、これが合図だ。

『500e』のアクセルを踏み、俺たちは女神とのドライブデートへと繰り出した。

今日のラビリントは、見慣れた街そのものだ。この間のような、苛立ちを誘うトリックはひとつもない。

狭く入り組んだ道を小気味良く、そしてチカラ強く、颯爽と駆け抜ける『500e』の走りを楽しみながら、俺はボタンを押してルーフを全開にした。

仕事を成功させた達成感も興じて、朝の空気と日差しがいつになく心地いい。

予定より30秒ほど早い10分ジャストでラビリントの門を潜り抜け大通りに出た俺たちは、アクセルを全開にした『500e』をトリノ方面へと走らせた。



第九章

俺たちを悩ませたラビリントのトリック。

それは、22時から翌朝5時までの街の仕組みにあった。

その時間、この街には自動車やバイクなどエンジンを載せた車両は通っていない。

見かけるのは、自転車や馬車、そして酒に溺れた酔っ払いくらいだ。

ここの住民の中では、それがスタンダードなルールになっている。

つまり、それを知らないのは余所者。

しかも、お宝満載の美術館へ向かう車両といえば、俺たちの同業者という認識なのだ。

深夜の時間帯にエンジンを積んだ車両が通ると、排気ガスをセンサーが感知し、街中に通告。

それを確認した住民たちが、迷路のような街に罠を仕掛けるというルールなのだ。

つまり、街を挙げての大捕物というわけ。

街中で盗人を炙り出し、当主であるアマタバに献上する。

それが、この街の正義、そしてモラル。

それにしても、このあまりにもアナログな罠に一流の同業者たちが何十年も悩まされてきたとは、何とも不思議なことだ。

ただ、わかったのはここまで。アマタバに引き渡された泥棒たちがその後どうなったかは、いくら調べても誰も口を破ることはなかった。

それに加え、観光客を含め、少しでも知らない者が街を歩いていれば、声をかけるというのもこの街の風習らしい。

そして、怪しいと思う者がいれば、街中のポストや電話、または町内無線でアマタバに伝えるのも古からの決まり事だという。

「知らない人は、犯罪者予備軍」ということなのだ。それを知ると、あの少女の「お父様にそう言っておくね」という言葉も合点がいく。

とはいえ、何ともかわいそうに。本人たちは気づいていないが、約4,000人の街人すべてが、生まれた瞬間からアマタバのスパイなのだから。

以前、ラビリントの幸せそうな様子を見て、次元が言っていた「オレからしたら、なんだか笑ってる顔すら、ウソに見えるぜ」という言葉が、いまになって腑に落ちる。

第十章

ラビリントを出てトリノへ向かう途中『500e』の窓から、トラットリアのオープンテラスで、またミートボールのスパゲティを食べる銭形が見えた。

まだ、朝6時だというのにココロも身体も元気そうで何よりだ。

『500e』の静粛性のせいかな、食べるのに夢中のせいかな、すぐ横を通る俺たちに気づきもしない。銭形をここまで魅了するとは、この店のパスタは相当罪深い。

「とっつあん、スパゲティ、ホントに好きだなあ〜」

あまりの姿に、つい声をかけてしまった。

「おい、ルパン！よせよ」と次元。

「愚かな・・・」と五ェ門。

「うんぐ、ぼで、でゅばんぐぐ・・・」 解読不明な言葉を発しながら、銭形は食べかけのスパゲティをそのままに、お馴染みのパトカーに乗り込んだ。

「待てえ〜！ルパ〜ン！」

早朝のトリノに響き渡るいつもの濁声が、心地よいメロディのように寝不足の鼓膜に優しく響いていた。

第十一章

銭形との追いかっけこは、まるで観光ツアーのようだ。

トリノの象徴ともいえる国立映画博物館モーレ・アントネリアーナの前を駆け抜けた俺たちは、トリノ市立古代美術館として利用されているマダーマ宮殿の横を90度左折した。

こんな時でも目に映るものすべてが美しく思える。

今度トリノに来る時は、観光で来ることを強く心に決めた。

それにしても、銭形はしつこい。そして、部下たちも銭形に似て諦めが悪い。

そんな彼らに俺と次元は必要最小限の引き金を引き、五ェ門は刃を振るった。

こんな慌ただしいシーンでも『500e』の加速とレスポンス、

そしてワンペダル走行は本当に心強い。

この様子なら、銭形たちを巻くのも時間の問題だ。

ただこんな時に、また嫌な予感がした。

その瞬間、ロングヘアで背中を撫でられるような妙な感覚が襲った。

不二子だ。

後部座席に置いておいたバッグ型のケースを、ヘリコプターを使って上空から奪っていった。

「不二子ちゃん、そりゃないぜえ〜」

「ごめんなさい、ルパン。これ、ずっと欲しかったの」

「それは知っていたけどよお・・・」

「ルパン、ありがとう。大切にするわ！」

そう言うと、不二子は見ると見ると上昇し、すっかり小さくなっていった。

「おい、ルパン。どうなってんだ」険しい表情で、次元が睨みつけてくる。

「まあ、心配するなって。とにかく、ここを切り抜けようぜ」

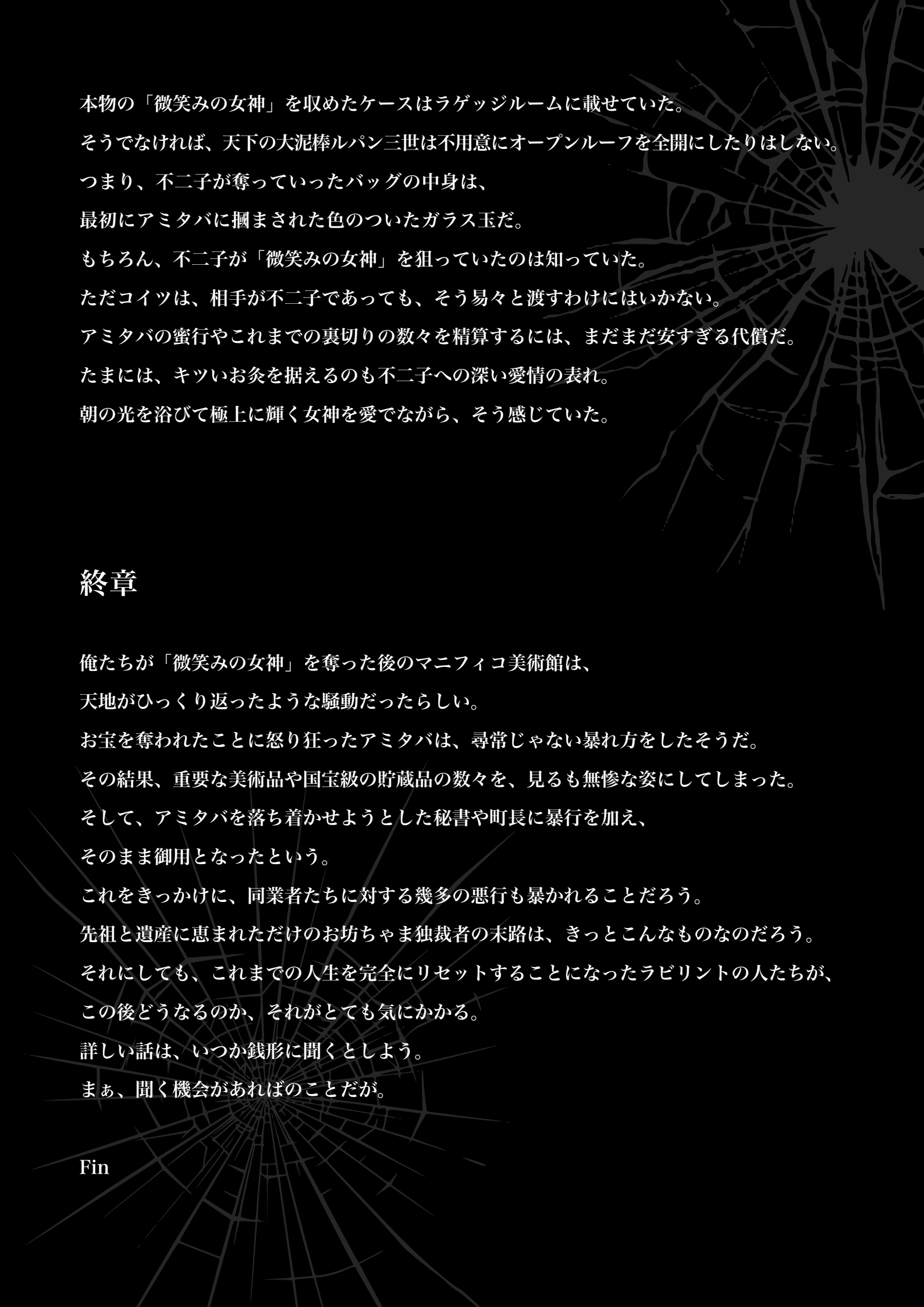
「無念だ・・・」五ェ門の哀しげな表情と次元の苛立ちに、少し申し訳ない気持ちになった。

まもなく、トリノ郊外の人里離れた村を『500e』は、ゆっくりとウイニングランしていた。

「何ニヤニヤしてんだよ」仏頂面の次元が問いかけてくる。

俺は、ゆっくりと『500e』を停車させた。そして、クルマの外に出てリアゲートをそっと開けた。その瞬間、次元と五ェ門は微笑を浮かべながら、声を合わせた。

「なるほどな・・・」



本物の「微笑みの女神」を取めたケースはラゲッジルームに載せていた。
そうでなければ、天下の大泥棒ルパン三世は不用意にオープンルーフを全開にしたりはしない。
つまり、不二子が奪っていったバッグの中身は、
最初にアマタバに掴まされた色のついたガラス玉だ。
もちろん、不二子が「微笑みの女神」を狙っていたのは知っていた。
ただコイツは、相手が不二子であっても、そう易々と渡すわけにはいかない。
アマタバの蜜行やこれまでの裏切りの数々を精算するには、まだまだ安すぎる代償だ。
たまには、キツイお灸を据えるのも不二子への深い愛情の表れ。
朝の光を浴びて極上に輝く女神を愛でながら、そう感じていた。

終章

俺たちが「微笑みの女神」を奪った後のマニフィコ美術館は、
天地がひっくり返ったような騒動だったらしい。
お宝を奪われたことに怒り狂ったアマタバは、尋常じゃない暴れ方をしたそうだ。
その結果、重要な美術品や国宝級の貯蔵品の数々を、見るも無惨な姿にってしまった。
そして、アマタバを落ち着かせようとした秘書や町長に暴行を加え、
そのまま御用となったという。
これをきっかけに、同業者たちに対する幾多の悪行も暴かれることだろう。
先祖と遺産に恵まれただけのお坊ちゃま独裁者の末路は、きっとこんなものなのだろう。
それにしても、これまでの人生を完全にリセットすることになったラビリントの人たちが、
この後どうなるのか、それがとても気にかかる。
詳しい話は、いつか銭形に聞くとしよう。
まあ、聞く機会があればのことだが。

Fin